

## 私の中に残る長野の教え

愛媛県立長浜高等学校 2年 津田七羽

私は今、親元を離れて愛媛で生活しています。やりたいことがあり、愛媛県の高校に入学しました。高校生になるまでは長野県で暮らしていました。地元を離れて生活することで、自分が生まれ育った長野県で学んだことがより意識されるようになりました。

まず一つ目は、誰もが教えてもらったことかもしれませんが、感謝を忘れないということです。誰かに何かをもらった時、誰かが助けてくれた時、出てくる言葉は「ありがとう」だと思います。言葉に出さなくても礼をするだけで気持ちは伝わります。私が生まれ育った長野県は、信号機のない横断歩道での車の一時停止率が2022年では82.9パーセントと全国で一位です。調査を開始した2016年以來ずっと長野県が停止率全国一位を誇っています。その理由には、停止してくれた車のドライバーに対する「礼」があるからだと思います。実際に子どもの頃からお礼をするように指導されてきましたし、歩行者が横断歩道を渡っている最中や渡り終えた後にしっかりとハンドサインやお辞儀をしている様子をよく見ました。歩行者がいる時に横断歩道の前で一時停止するのはドライバーの義務だとは言え、歩行者からお礼をされて嫌な気持ちになる人はいないと思います。そして、「礼」の気持ちを持った子供達が大人になり、車の運転をするようになると、同じように歩行者に道を譲るでしょう。このような「礼」があることで、笑顔や譲り合いの輪が広がり、より良い地域になっているのだと思います。他に親からも感謝について教えられました。私が中学生の時は塾まで親に送ってもらっていました。ある日、原因は忘れてしまいましたが、母と揉めてしまいました。そのまま塾に行く時間になり、私は何も言わずに母の車に乗りました。そこで母に、「お願いですぐらい言いなさい。送ってもらうことが当たり前じゃないんだよ。」と言われました。確かに母の言うとおりです。当たり前にもいつも送り迎えをしてもらっているということはありがたいことなのだと思います。それから私は母だけでなく、誰に対しても感謝の気持ちを込めて「お願いします。」と言えるようになりました。今は親元から離れているため、いろいろな人たちが私の生活を支えています。やってもらうことを当たり前だと思わず、相手の立場になって考え、いつも感謝の気持ちを忘れないようにしています。心を入れて「ありがとう」を伝えること、「礼」の気持ちを持つことが今の自分を支えてくれているような気がします。

二つ目は、自然に触れることの大切さです。長野県は総面積のうち84パーセントが山地です。周りを見渡せばどこかしらに山がある環境です。私は保育園の時から当たり前のように山登りをしています。草花や大きな木、いろいろなところで鳴いている虫。登山を通して様々な自然に触れてきました。山頂にいた牛の群れに驚いたこともあります。海はない長野県ですが、湖があり、小学生の頃はよく湖でも遊びました。近くの川に飛び込んで遊ぶなど、自然はいつも近くにありました。

現在は、山も川も海もすぐ近くにある場所で暮らしています。私は自然に触れることで心が落ち着きます。小さな頃から自然に触れて育ってきたことで、動物にも興味を持つようになりました。幼少期に体験したことは、周囲に素晴らしい自然があったからこそできたことが多いと思います。そのため、自然破壊や自然災害があるたびに何か自分にできることはないかと思っています。シーカヤックの授業をする近くの海が台風の影響で荒れ、海ごみが海岸に打ち上げられていた時には、私自身海が好きということもあり、人一倍ゴミ拾いをしました。こんな小さなことでもそれが社会全体に広がっていったらいいなと思います。

冒頭で述べた「やりたいこと」とは、水族館の飼育員になることです。その夢に近づくため、校内に水族館がある国内唯一の高校に入学したのです。長野の自然が、私に夢を持たせ、県外の高校に入学する勇気まで与えてくれたのではないかと思います。水族館部の活動でも海や川の自然環境について考えさせられることが多く、将来は自然と共生できる水族館を作っていきたいと思っています。

水族館部は、校内の水族館を管理、運営し、月1回水族館を一般公開しています。そこでは、たくさんのお客様との関わりが生まれます。ここでも、小さい頃から自然と身に付けてきた感謝の気持ちを忘れないという「礼」の精神が生かされているように感じます。

地元、長野県で学んだことが今の生活に大きく関わり、今でも心掛けていることにつながっています。今回、改めて私のふるさとである長野県について考え、多くのことを学んだ地元に感謝し、これからも頑張ろうと思えました。